RI第2510地区
留萌ロータリークラブ
会報
2012►2013
WEEKLY REPORT

奉仕を通じて
平和を
田中作次
2012-13年度
国際ロータリー会長

留萌
ロータリークラブ
会長目標
ロータリーを楽しく・
学び・奉仕しよう

会長／山本譲二　幹事／森　幹雄

プログラム

●本日
来賓卓話
留萌振興局 地域政策部長　後藤　規之 様

●次週予定
来賓卓話
北海道議会議員　石塚　正寛 様

配偶者誕生日
1月27日　中川　豊美
1月28日　堀　美由貴
1月29日　鈴木　正枝

No. 2543
第27回　1月23日

出席報告

前例会
会員総数……42名
出免会員……10名
出免出席……6名
基準会員出席……20名
出席率……66.66%

前々会　第24回　12月19日
欠席会員……11名
内メイクアップ……6名
修正出席率……87.50%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

会長報告

1．2013年留萌市国際交流新年交礼会の案内をいただきました。
2．㈱ヤクルト北北海道留萌より新築祝いの礼状を頂きました。

幹事報告

- 2012～2013年度地区国際奉仕事業の申請一覧が届いております。回覧いたします。
- リスボン国際大会の案内を回覧致します。申込み締切日が迫っておりますので、参加希望者は幹事までお知らせ下さい。
- 2020年開催のオリンピック、パラリンピックを東京へ誘致するパンフレットとバッジが届きましたので、受付でお渡ししています。

３分間情報

会員研修委員会　福士委員長

「未来の夢計画」

2005年、ロータリー財団は奉仕の２世紀目に備えるため、「未来の夢計画」と呼ばれる長期計画に乗り出しました。この計画は、これまでよりも規模が大きく、持続可能な奉仕プロジェクトを支援することによって、ロータリアンの活動と寄付の成果を最大限に高め、一般の人々の認識を高めることを目的としています。複雑な奉仕プログラムと事務的な手続きを簡素化すれば、奉仕活動への参加が活発になり、財団のリソースが「自分たちのもの」であるという会員の自覚が高まるため、結果として入会者と寄付者が増えると財団は考えました。

2010年７月から世界531地区のうち100地区

（日本は６地区）で試験段階に入り、2013年７月から世界全地区で新制度に移行します。

未来の夢計画には次のような目的が掲げられています。

1．財団の使命に沿って、プログラムと運営を簡素化すること。
2．ロータリアンが関心を寄せている世界の優先的ニーズに取り込む事によって、最大の成果が期待できる奉仕活動に焦点を絞ること。
3．世界的目標と地元の目標の両方を果たす為の資金を提供すること。
4．意思決定権をさらに地区とクラブに移行する事によって、地区レベルとクラブレベルでロータリー財団が自分たちのものであるという自覚を高めること。
5．ロータリー財団の活動に対する理解を深め、ロータリーの公共イメージを高めること。

次回は「プログラムの６つの重点分野」について発信いたします。

【ミニ情報】

確定申告の時期はやってきます。政治献金を行なった際に寄付控除の対象となる場合があります。寄付金控除又は税額控除を受ける場合には、確定申告に総務大臣または都道府県の選挙管理委員会等の確認印のある「寄付金（税額）控除のための書類」を添付する必要がありますので、ご注意下さい。

ニコニコBOX

- 新春夜間例会都合で欠席いたしました　　堀会員
- ２月４～５日開催のやん衆横丁のチケットを販売させていただきました　ご協力ありがとうございました　　高橋会員

前　回	461,000円
今　回	2,000円
累　計	463,000円

プログラム

「年男大いに語る」

行徳　幸治 会員

私は、昭和28年３月28日に誕生し、巳年生まれの今年還暦を迎えました。

安倍首相の年頭所感ではないですが、蛇にちなみ、一皮脱皮して今年も頑張りたいと思います。

私の父方の祖先は、九州の肥後熊本生まれであります。南国生まれのＤＮＡが入っているせいか、温暖な気候の土地でトロピカルフルーツに囲まれて暮らすのが夢であり、北海道のこんな雪深いところでの生活は、大変ゆるくないです。本日の年男大いに語るでは、対馬例会運営委員長さんに「何でも良い、時間を持たせろ」という事でしたので、何かネタはないかと新聞を見ていましたら、台湾５日間59,800円というツアーが出ておりました。寒中なのでせめて温かい「台湾首狩り族」の話をしたいと思います。

台湾に行かれた事のある方は、彼の国の人、日本人に対して過剰なほど好意を寄せられた経験がお有りかと思います。台湾は明治28年から昭和20年の50年間日本領でありました。

台湾は上から見ますとサツマイモの形をしており、中央部から西側（大陸側）は、平坦ですが東側（太平洋側）は海岸近くまで巍々たる大山塊が迫り、ほぼ中央に玉山（新高山3952m）が突出している地形になっています。余談ですが、「ニイタカヤマノボレ」は日米開戦の攻撃開始の日本側の暗号だと言われます。ついでに、攻撃中止は「ツクバヤマハレ」だったそうです。

16世紀半ば、初めて台湾を見たポルトガル船のオランダ人航海士が、紺碧の海に浮かぶ翠したたるこの島を見て「イーリャ・フォルモサ」（なんて美しい島）と叫んだことから、別名「美麗島」とも呼ばれます。台湾に17世紀頃に中国福建省から渡ってきた漢民族や、土着の蕃人と称される原住民が住んでいました。平地に住み、漢人と結婚したりして漢化が進んだものを「熟蕃」。容易に馴染まず、山地に住むものを「生蕃」と呼びました。

これら生蕃は、十幾つかの部族に分かれ、主に焼畑農業や弓、槍によって鹿や猪等の動物を獲り、肉を食べ、皮を市に持ち出し、酒食に変えて生業としておりました。成人の証として男女共、顔や体に入れ墨をし、部族固有の文化を持ち、縄張り意識が特に強く、各々がお互いに言語も通じないほど孤立化して生活しておりました。

「蕃」とは草が重なり茂る、とか未開の異民族、の意味ですが、高砂族とも言われます。高砂族には首を狩る風習がかつてありました。これは東南アジアの島々にも見られた奇習で、「死後、死者の国での審査官が生前獲った首の数の入れ墨を見て、入国を許可させるから」とか、「一人前の成人男子の通過儀礼」とか、「名誉を重んじる為」とも云われていますが、獲得した首は一ヶ所に集めて飾りますが、殺人の罪悪感は無く、むしろ良い行いとして、祖先より伝わる神聖な儀式であった、と云われています。

この首狩りは「出草」と呼ばれますが、草むらの中から、首を獲るべく飛び出して行く剽悍なイメージがよく出ている言葉だと思います。野蛮だといえば野蛮ですが、日本でも江戸時代まで戦勲の証として敵の首を持ち帰る事がありましたし、褌をする風習や、若者たちが共同生活をする若衆宿、また結婚すると実家から妻の家へ婿として入る通い婚等々は、日本の九州や四国、紀伊半島の西日本あたりに、戦前からよく見られる習俗であります。また、業界によっては入れ墨も男伊達を示す為にする、と聞きます。これら高砂族の風習も黒潮に乗って日本へ渡海してきた「南方海洋日本人」の祖先の姿と言えるかと思います。

1895年（明治28年）台湾は、日清戦争勝利の結果、日本に割譲されましたが、相次ぐ島民の反乱やペスト、マラリヤ等の熱帯病に「乞食が馬を貰った様なものだ。飼う事も、乗る事も出来ない」と言われながらも、日本は台湾を「実り多い植民地」とするため、当時の貧乏な国情には不釣り合いな程の国家予算を振り向け、鉄道や産業振興、水利工事等によって農業を飛躍的に発展させ、日本式社会制度を持ち込みました。

また、日本人も台湾人も天皇のもと、「一視同仁」とする皇民化政策を取りました。昭和５年「霧社事件」という、横暴な日本の警察官の差別的な態度と侮辱された事に端を発し暴動が起き、山地原住民に139人の日本人が殺害される、という事態以後、大きな反乱事件も収まっていきました。

日本政府は、台湾人向け公学校や蕃人公学校を作り、教育や日本語の普及に努めました。とはいえ、日本人学童には小学校は別にあったそうですので、差別もあったろうと思いますが台湾の人々は徐々に帰順、台湾統治はうまく行なわれていきました。特に高砂族にあっては、この教育で公用語の役を果たし、今日でも部族間の交渉事には日本語が用いられると言います。

以後、日本の法律による公平な治世や、嘘を嫌い約束を守る、忠義、尚武の心などが理解される様になると、日本の美点を「日本精神」（リップンチェンシン）と呼んで純朴な高砂族の心情と深くフイットするところがあった様です。また、現在の価値観と違い、明治から昭和の初期の兵隊さんとは、規律正しく、一種の模範人間と見られていたと、金美齢さんは言っています。

昭和16年12月大東亜戦争勃発。太平洋戦争とも言いますが、白人の植民地支配からアジアの開放が戦争目的の一つとしていますので、当時はそう呼称しました。同年、「台湾人志願兵制度」を募集しますと、定員1020人に対し45万人、翌年1008人に対し60万人の志願兵が殺到します。終戦までに台湾籍日本兵として８万人、軍属を含めると21万人が軍務に就き、うち３万人ほど

が戦病死しております。この時、日本軍は南方戦線に向けて、かつての反乱事件等で思い知った高砂族の、獣の様な方向感覚、耳が良く夜目が効き、素足でも音がなく夜の密林を駆け巡り、一たび会敵すれば、勇敢に立ち向かう戦士、としての資質に目を付け、「高砂義勇隊志願兵制度」を実施しますと、高砂族総人口の15万人中６千人程が採用されました。選抜に漏れた者は怒り、泣いて悔しがったと言われます。中には50代の人も応募してきた、という事からもその熱意の程が伺われます。高砂義勇隊の身分は軍属であり軍人ではないが、戦闘に参加し、戦死者の割合は、作戦を共にした軍人よりも高く、その半数が戦死したと言われます。

大正８年、（スニヨン）は、台湾東県都歴村で原住民アミ族農家の６人兄弟の末子として生まれました。日本名は「中村輝夫」。 公学校４年生まではオール５であり、野球や相撲が大好きな少年であった。同級生の話によると輝夫は（以後敬称略）アミ族には珍しく、口下手で短気な性格であったと言われています。輝夫は昭和17年４月、高砂義勇隊に自分の親指を切った血で願書を書いて志願した。昭和18年10月台湾歩兵第一連隊に入営しました。輝夫はこの時新婚であり、妻のサンピ（日本名 正子）と１歳になったばかりの長男ヒロシを残しての出征でした。昭和19年７月、部隊はインドネシアのハルマヘラ島へ上陸。ここで遊撃（決戦を避け、適時適切に攻撃をするゲリラ的攻撃）の教育を受けました。ちなみに、この島には同時期、後の青い山脈や任侠映画で知られる俳優（池部良）が衛生隊少尉として配属されておりました。

その後、近くのモロタイ島に渡りましたが、島民の話すインドネシア語と台湾諸語は数詞や語彙に共通点が多く、僅かに意思疎通が可能でありました。また日本人の宣撫工作が成功していた為、島民との関係は良好で、輝夫は「アニファ」という恋人が出き、指輪を贈っています。昭和19年９月モロタイ島に４万人の米海軍が艦砲射撃のうえ上陸、400人で手榴弾、小火器の装備しか持たない守備隊は、命からがら山中に逃げ込み、物資補給も途絶えるが、高砂義勇隊員は先祖伝来の蕃刀でジャングルから、バナナ、パパイヤ等を採取して守備隊に貢献しています。また、幾たびか夜間、敵陣地を襲い、食料まで取ってきたそうであります。輝夫は偵察隊として敵上陸地点を偵察中、気づかれ本人以外は全滅、本体とも逸れ、ジャングルで潜伏生活を始めた、という説と、また米軍上陸前に内地人の兵隊と喧嘩になり、ケガをさせて高砂族の仲間と共に逃亡したという説もあります。

昭和20年敗戦。日本軍は引き上げ始めたが、集合場所に集まらなかった者は、戦死とされました。

昭和31年に内地人３名、台湾出身の６名からなるグループが発見されましたが、依然と輝夫は山中に小屋掛けをし、衣服は着用せず、毎朝起床後の洗面、宮城遙拝と体操を欠かさず、銃の手入れも怠らず、たった一人の兵営生活を続けました。暦は月の満ち欠けから、火は虫眼鏡や銃弾の火薬を使い、食料は自作の網で川から魚や仕掛け罠で猪を捕まえたり、畑で芋やバナナを栽培していた。

輝夫にはドヤダイドという、モロタイ島上陸直後からの同年輩の協力者がいて、砂糖や塩、海の魚等を分けてくれた。この協力者からも終戦を教えられたが説得に応じず、居場所を秘密にするよう告げていた。昭和43年、病気の為危篤となったドヤダイドは、息子に輝夫中村との交流の事を打ち明けた。息子はドヤダイドの死後も秘密を守っていたが、ふと友人に話した為、島中の噂になった。

その後、かつての上官と遺骨収集団が同島を訪れた際、その話を聞きつけ、インドネシア政府に捜索を依頼。

昭和49年12月、インドネシア人総勢11人からなる捜索隊は、島の奥地で鳥や猪の鳴き真似をしつつ竹を切る日本兵を発見し、事前に練習していた「君が代」を合唱した。輝夫はこれに驚き、局部を隠しつつも直立不動の姿勢をを取った。捜索隊は続いて「愛国行進曲」を唄ったが、あまりにも下手糞なので日本人でない事がわかり、輝夫は銃を構え「バカヤロー」と叫んで抵抗したが、終戦の事、インドネシア独立の事、

同国と日本は友好国である事を説得。服を着させて下山した。

面会した日本人駐在官により、「逃亡兵にあらず」と認定され、非公式に日台間で調整のあと、「台湾に帰りたい」との本人の希望を受け、昭和50年１月、台湾に飛行機で帰国し大歓迎を受けた。輝夫は空港で実に31年ぶりで、妻の正子と長男のヒロシに再会を果たし、次の日、故郷の村へ帰った。

家族との再会、久々の団欒に寛いだ様子であったのだが、住民たちが歓迎のしたくをして待つ小学校へ向かうマイクロバスの中で、妻・正子が10年帰りを待ち、ついに16歳年上の男性と再婚していた事を涙ながらに告白すると、激怒した輝夫は、妻と子供を歓迎会場手前でバスから降ろすと、実家へ帰り布団を被りそのまま出てこなかった。

一方、その事を知った新しい夫は、「中村さんが帰ってきたのは嬉しい。自分はいつでも出て行くつもりだ」と語り、黙って家を出た。夫は72歳であった。

その後、輝夫は再び正子、ヒロシと孫達と暮らすようになった。中華民国政府によって、名前も「李工光輝」と変えられた。また日本政府や台湾省主席から、合わせて100万元（当時のレートで800万）あまりの見舞金を受け、アミ族一の大金持ちになった。

しかしこの事が原因で、中村一家は他のアミ族から疎まれ、中村自身も暴飲暴食、喫煙、檳榔（一種の覚せい剤）をかじり続ける等、すさんだ生活をし、映画に出演したり、花蓮市で日本人観光客向けのモロタイ島でのジャングル生活を張りぼてで再現したショーに出演したりしたが、不健康な生活により結核や肝機能障害にかかり、昭和54年には末期の肺がんと診断され、同年６月15日死去した。帰国から、４年半の命でありました。

アミ族に古くから伝わる伝説に、むかしマチェチェという男が漁をしていて、風浪に流され漂流するうち、見知らぬ島に打ち上げられた。気がつくと島民はすべて綺麗な女で、美しい宮殿につれていかれ、夢のような楽しい歳月が経った。ある日、望郷の念にかられ、海辺に出てなげいていると一頭のクジラが出てきて、一瀉千里に連れ帰ってくれたが、故郷はすべて変わり果てていて、妻子も居なくなっていた。という日本の「浦島太郎」の原型とも考えられる話があるそうです。

現代とは異なる価値観の時代、姓名が３つも変えられるという、数奇で矛盾に満ちた、運命に翻弄される男の話を致しました。

何やら、蛇だか鰻だかわからないような、掴みどころの無い話となりましたが、以上で私の「年男大いに語る」を終わります。

2012～2013年度　国際ロータリー第2510地区 第1グループ

I M 実 行 委 員 会

＜概要＞　日時　平成25年5月26日(日)
13：30　登録開始
14：00　開会・点鐘
16：30　懇親会
18：00　散会
場所　留萌産業会館

ガバナー補佐	清水　陞	会場監督	田中公一
ホストクラブ会長	山本譲二	会計	長谷川哲哉
実行委員長	高田　潔	救護担当	渡部英次
副実行委員長	中出敏彦	総合司会	高田　潔
ガバナー補佐室長	森　俊二	懇親会司会	接待委員会
ホストクラブ幹事	森　幹雄		

委員会	委員長	副委員長	委員
総務委員会	森　俊二	燕　美雪	鵜城　善輝　中川　勝美 対馬　健一　二ノ宮清信
登録委員会	鈴木　康伸	堀　光輝	平井　誠治　河部　勲 佐藤　潔　齋藤　清藏 高橋　理佳
会場委員会	大嶋　孝広	遠藤　光一	古野　晃洋　久木　隆生 松田　宏幸　宮尾幸之助 関野　政人　西谷　恭治 角　隆巨　佐々木　繁
接待委員会	行徳　幸治	阿部　洋一 福士　幸子	明澤　正樹　原田　功 原谷修次郎　松村　孝二 串橋　伸幸　中出　敏彦 西谷　英樹　辻本　哲也 渡邊　裕久